

<学会と社会との接点等に関するワークショップ一覧>

日時：2004年12月11日(土) 13:15～15:15

E会場 高校教師が訴える「ぜひ研究者にお伝えしたい遺伝子教育の危機的状況」

- このままでは生命科学は日本に根づかない -

世話人：福泉 亮（福岡県立修猷館高等学校）

現在の高校のカリキュラムでは、文系の生徒たちの多くは、「生物」という科目は履修するものの、教科書からは遺伝子教育の基礎が欠落している。そのため彼らはまったく遺伝子・ゲノムなど生命科学の基礎を理解しないまま卒業することになる。このように市民としてこの分野の科学リテラシーが欠如することは、社会的に生命科学に関する研究が認知される上では大きなマイナスであるといえる。また理系については、「生物」を履修する生徒が少ないため、高校で生命科学の魅力を知る機会がないまま進路決定をする生徒や全く「生物」を履修しないまま医学部など生命科学系の学部に進学する生徒が多く、生命科学系に進学する優れた人材の確保や大学の基礎教育での躓きが課題となっている。このような状況を打破するためには、長期的には初等中等教育における生命科学のカリキュラムの見直しが不可欠であるが、短期的には高校教師による学校設定科目の設置や実験の開発などの独自のカリキュラムの作成が唯一の打開策であると考えられる。そしてこのような高校教師の活動は、どれだけ大学などの研究者による積極的な支援が得られるかにその成果はかかっている。

F会場 生命科学研究の現場と社会：双方向のコミュニケーション

世話人：加藤和人（京大・人文科学研究所）、長神風二（日本科学未来館）、

菅原剛彦（日本科学未来館）

科学研究の現場と、一般社会との間を橋渡しするための専門の場を設け、人材を育成することの重要性について取り上げると共に、科学と社会との間のコミュニケーション活動に、研究者が自ら携わり、社会からフィードバックを得て研究そのものをより良いものにしていく双方向性について議論する。生命科学の進展に伴い、細分化する学問領域の相互の間でのコミュニケーション不足による軋みが生まれ、また先端的な研究の成果が、新規の治療法、技術、作物などの形で、社会に還元されていく過程で、従来の社会における倫理観・価値観・文化と相容れないことも多く、様々な局面で摩擦が生じている。これらの摩擦を、単に回避するのではなく、十分なコミュニケーション活動を行うことによって、新しい学問の形態や文化・価値観の創造を図ることで発展的に解消していく方向性について模索していく。

G会場 21世紀のライフサイエンスにおける知識の伝搬と促進

世話人：野田正彦（科学技術新興機構 研究開発戦略センター）

大量で多様な知識を整理し、体系化することは知識の伝搬の促進に重要な作業である。ことに、ライフサイエンスにおいては、知識を具体的な生命現象と関連づけながら整理し、生命の理解につながるように体系化することが目的であると同時に発展の為の要件でもある。重要ではあるにもかかわらず従来は軽視されがちであった知識、特にライフサイエンスにおける言語で記述される知識を整理する研究が、統合データベース、オントロジ、言語処理、生命誌、戦略的ファンディングなど伝搬される知識を様々な形で利用する分野の拡大により、ますます重要になってきている。本ワークショップではこれらの研究に関わる研究者から、分野の俯瞰や巨大知識をハンディーなものにするための試みなど最新の研究成果を紹介していただき、これからの研究を支える知識環境にどのような革新が必要かについて幅広い議論を喚起するとともに、知識の時代といわれる21世紀のライフサイエンスの発展に向けて具体的な研究戦略の提言につなげていくことを狙いとする。

H会場 第3回男女共同参画シンポジウム

女性研究者のキャリアアップについて：ガラスの天井はどこにあるか

世話人：伊藤啓（東大・分生研）、大坪久子（東大・分生研）

現在、分子生物学の分野では、学部～ポスドクの階層では女性の比率は3割近くに達している。しかし助手～教授の階層ではポジションが上がるにつれ、女性比率は有意に低下している。上級研究職への採用や昇任に際して、あからさまな女性差別規定が存在するわけでもなく、女性を意図的に排除する意識も現在では少なくなっている。このように制度的には開かれていて上が見えていくはずなのに、実際には目に見えない障壁がある状況を「ガラスの天井」と言う。この原因として、女性は結婚や育児などの要因を挙げる人が多いが、男性は採用される側の意識などの要因を挙げる人が多く、認識のギャップが存在する。本シンポジウムでは、まず現在集計が進んでいる「男女共同参画学協会連絡会アンケート調査」の解析結果を報告する。ついで、上級研究職に現在ついている人や採用・昇任の人事に携わる立場にある人から、制度や男性女性の意識の面で、どこを変えてゆく必要があるのかを議論し、上級研究職をめざす女性研究者への具体的なアドバイスを行なう。